

猶以委細兩使可相述候以上

青陽之慶賀不可有際限候禁裏彌御機嫌能被成御超歲珍重存候依之以大友少將織田侍從御太刀一腰御馬一疋致獻進之候件之趣宜有奏達候恐々謹言

正月十幾日

綱吉御書判

高野大納言殿 柳原前大納言殿

兩傳奏拜領各通御内書之御文言は

年甫之嘉儀欣幸候彌御無異越年之由多慶處候依之太刀一腰馬一疋相贈之候猶兩使口上可演候謹言

正月十幾日

綱吉御書判

高野大納言どのへ

如斯なり綱吉公と申奉るは五代目常憲院様なり彼御代より御文言如斯文言延寶年中以前は今少御念入たり併宛名置所月日の恰好殿文字何れも如此略中拵高家衆參著之由從御諸司傳奏迄屆有之二日め三日めの内禁中院方關東御三方之御德日を選み參内有御諸司御附之武家衆同道にて長橋玄關より昇殿あり小御所にて天顔を拜し天盃頂戴する事なり略中六七日め月番之傳奏之館にて饗應有御料理は三汁十一菜美食厚味之御振廻御相伴は御附の御武家衆一人也御料理出ると追付禁中より八九寸計之生鯛炙掛け卸生姜大皿に盛肴之眞中に十文字切目に入る是は天子御箸を被爲御との印とかや此肴天子の御箸屬られたるを臺に申立御所方にては此振舞を今日は御上使へ御下也御料理被下ると申習はし候也御所より傳奏之御館迄持參之御使は鳥飼衆也略中頂戴事終り挾箱へ入旅宿へ御持歸也天子より御懲懃の御會釋也兩傳奏と三々九度の盃事有略中但錫冷酒也日限有之御暇被下節參内長橋殿御上使に直に